

## 我が国ニッポンの事

○「I think, Because, Why?」。

「我が国の教育の現状」を考える時、これは極めて重要な言葉ではある。

最近、ハーバード大学の Michael Sandel 教授の「白熱教室」という授業がテレビで知られている。彼は、「正義」、「公正」、について学生達と議論を深めている。彼によると、「善」にたいする考え方は「多元的」に存在する。従って「善」は「反照的均衡」（個々の事例について我々が下した判断と、それらの判断の根拠となる一般的な原理との間を行ったり来たりすること。反照：reflection。）によって、より優れた「正義」に達することが出来るという議論をしていると思われる。

つまり、我が国の教育の在り方の問題から更に、「人間のより好ましい生き方」の追求のためには「I think, Because, Why?」がうまく機能することが挙げられる。我が国で「物事が行き詰っている原因」の解決方法の一つになるのではないかと思う。

○外国人と付き合っって強く思う事は、ニッポン人は本気で「議論」はしない、真面目に話し合う事は避ける、問題を先送りする。西洋人はジョークが好きだが、ジョークは極めて重要な役目を有する。これを使う事の意味を知るべきではないか。

○福島県原発事故の問題。「核アレルギー」：きちんとした議論も知識も無く「核は悪」であるという考え。「折鶴」で「平和」が来るか。原子力についてどれだけの知識を持っていて騒いでいるのか。「事故隠し」「隠蔽」「原子力産業」に対するタカリ。

○「事故」は警察の仕事か。「事故」の中に「犯罪性」を探る意味は何か。「事故」が「事故隠し」に繋がる国ニッポン。何故航空機事故は少なくなったか。

○「科学（理学）」と「技術（工学）」。理科離れの進行。科学にウソは通じない。

○（高等）教育の問題。マーチン・トロウ：エリート、マス、ユニバーサル・アクセス。「低学歴社会」の進行。「無責任社会の進行」。「習っていません」は正当な権利か。

○「当然始めから予想された高度情報化社会の負の部分」。「匿名社会の進行」。「いじめ」の手段。山下俊一教授に対する攻撃。「10mSv 程度では癌は生じたことは無い」。

○我が国の問題の本質の一つは「国民総知識音痴・意図的無知?」。「この世で最も怖いものはお化けでも天災でもない、真実を知らない、知ろうとしないこと」。